

- 提案1 グローバルな課題を理解する**
=「環境」と「人権」を柱とした参加型経験学習
- 提案2 課題にせまる参加型手法**
=子どもたちの自省と共感と考える力を伸ばす
- 提案3 豊かな人間関係を創る**
=自己理解の鏡としてのコミュニケーション
=コミュニケーションを恐れず、コミュニケーション・
出会いから学ぶ
=コミュニケーションが成立するコミュニティづくり
- 提案4 コミュニティ意識を育てる**
=コミュニティの課題解決に取り組む
- 提案5 Learning Organizationを実現し、 Learning
Society のリーダーとなる学校を目指して**

総合的な学習についてのERICの提案

総合的な学習の目的は、学習内容の総合性・社会性と学習者が主体的・体験的に学習内容を自ら学びとっていくことの2つの意味を持って「総合的」と表わしています。

総合的な学習が提起されてきた背景については、いろいろところで語られているので、ここでは重要なポイントを共有するにとどめます。

これまでの教科中心カリキュラムを基本とした教育内容の欠点は、1. 学習者の生活および関心から離れすぎてしまっていること＝学習者の直接的ニーズに答えられていないのではないか、2. 学習者の主体的な学習につながっていない＝意欲や学び方、思考能力が育っていないのではないかという問題と、時間割の制約が学習の発展性と展開を制約してきたのではないかと、3. 環境問題などの新たな学習課題に対応できない という3点に集約できるのではないのでしょうか。総合的な学習は、教科学習を否定するものではなく、その欠点を積極的に補うことを目標として考えられるべきなのです。新たな教科を作り出すことが目的なのではありません。

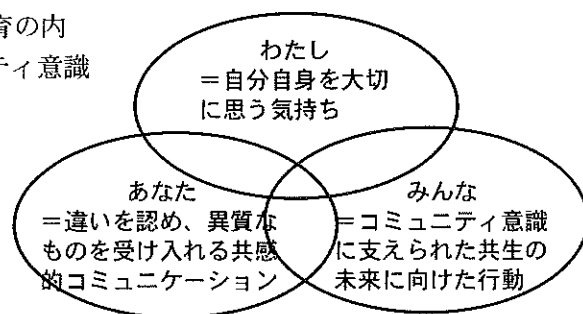
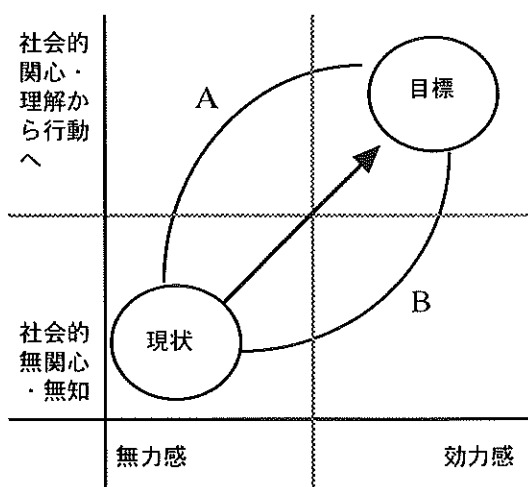
総合的な学習を考えようとするとき、誰もが疑問に思うことは、次の3点にまとめられると思います。

1. どのような教育／学習内容が求められているのか
2. 学習における学習者の主体性とは何か
3. 実施・推進体制のあり方と人材育成はどうあるべきか

ERICは、1989年以来、国際理解教育のあり方を追究する中で、次のような原則の重要性を確認してきました。

1. 学校教育は学習者と社会を結ぶためのものであり、そのためには、ひとりひとりの社会的関心と行動への意欲をつなぐ必要がある＝「気づき」から「行動」へ
2. 学習者の「生きる力」をのばすこと、効力感を高めること＝エンパワーメントの基本は「参加」にあること。
3. 教育目標・内容・方法は三位一体のものとして考えられなければならない、方法や学校のあり方自体にメッセージがあること。

ERICでは、これまで培った参加型で伝える国際理解教育の内容、学習者の自己理解・コミュニケーション・コミュニティ意識を柱としたエンパワーメントのためのスキル、および地域社会から地球社会までの社会参加のための参加型手法を活かして、総合的な学習の推進のための5つの提案をまとめました。



提案1 グローバルな課題を理解する

= 「環境」と「人権」を柱とした参加型経験学習

ERICは、参加型学習を日本に紹介する組織の草分け的な存在として、1989年以来、10冊以上のアクティビティを中心とした書籍を翻訳出版紹介してきました。

アクティビティというのは、「概念」を参加型手法を通して学ぶためのもので、子どもたちがからだを動かして共通の体験をし、それについてふりかえり、「概念」や「原則」を発見し、応用する力をつけられるように工夫された活動です。そのような指導方法を「経験学習の4段階」と呼んでいます。

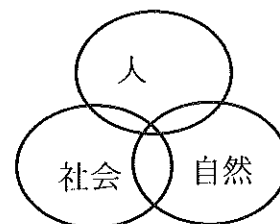
体験するというのは、非常に重要なことで、「聞いたことは忘れる、見たことは覚えている、体験したことは応用が効く」と言われるように、五感を通して気づき、からだを動かすことで、頭だけでなく、心も動かされるようなものであるのです。子どもの頃の遊びの体験から学んだことがたくさんあるように、そして、体験の中に心にひっかかるものが長く残り続けるように、わたしたちはまさに体験から学ぶのです。経験学習の指導というのは、100回の体験を通して発見したり、学んだり、わかったことを、一度の体験について、その時の心の動き、考えたこと、感じたこと、気づいたことについてふりかえるとともに、仲間からの違った感想、気づきを聞くことで、体験したことの内実を豊かにし、そして、「概念」や「原則」として了解し、自分なりの言葉で表現できるようにしていくものです。アクティビティのひとつひとつは明確なねらいを持ちながらも、決して正解がひとつだけというようなものではなく、オープンエンドな展開を想定して行うことが気づきの豊かさと、学習者ひとりひとりの学びの豊かさにつながるのです。

そのようなアクティビティの指導においては、ファシリテーターという名称が示すように、「気づいたこと、感じたこと、わかったこと」を引き出し、コミュニケーションを活発にし、学びを活性化することのできる人材が求められるのです。

グローバルな課題の基本にある「概念」「構造」などをアクティビティを通して理解していくことが、「気づき」から「行動」への応用力の基盤なのです。

ERICには1000を超えるアクティビティの蓄積があります。「環境」と「人権」を柱にそれぞれ50選の主要アクティビティを選んであります。ぜひ、総合的な学習の時間の「動機づけ」あるいは学習の共通基盤づくり、まとめの学習などの諸段階で取り入れていただきたいと思えます。

1. 聞いたことは忘れる、見たことは覚えている、体験したことは応用が効く
2. わたしとグローバルな課題を結ぶ
3. グローバルな課題の概念的・構造的な理解を進める



経験学習の4段階

1. 体験する
2. ふりかえる
3. 一般化する
4. 応用する

環境について理解するための基本概念	人権について理解するための基本概念
<p>エコロジー／生態系 エネルギー システム・構造、パターン リサイクル 葛藤/ジレンマ 共有物(コモンズ) 賢明な利用(wise use) 資源、再生可能資源 資源の配分・分配 持続可能性 自給自足 循環型社会 人口、食料、 大量生産・大量消費、廃棄物 生物的多様性、生息地、絶滅、野生生物 有限性・閉じた系、成長の限界 物質循環・食物連鎖</p>	<p>自分を大切に思う気持ち 他者を尊重する 多様性を認める 基本的人間の欲求(BHN) 家族・コミュニティ・文化に対する権利と責任 暴力(直接的／社会的・構造的、物理的／精神的)を受けない 差別・抑圧 偏見・ステレオタイプ 二重拘束(ダブルバインド) 多数派の圧力・少数者の不利益 権利・市民的権利 寛容さ 文化的・社会的多様性 自由、自己決定、自己責任、自主性、主体性 民主主義 対立、紛争、戦争、軍縮</p>
<p>人間の生の質quality of life、人間の尊厳、いのち、 多様性、異質性・違い／共通性、相互依存・つながり、 平等・不平等、経済格差＝富の配分、先進国・途上国、開発、援助／国際協力、経済成長(発展)／GNP／国際 経済、債務、公正さ、ジェンダー、障害者、高齢者、若者、子ども、先住民、少数者(マイノリティ) 参加、個人的なことは社会的なこと、成長の限界、 変化と未来、未来／未来の世代、価値／価値観、パラダイム、 コミュニティ、地域／地域社会、市民/地球市民</p>	
<p>共通する基本的態度・スキル</p>	
<p>自己理解、主体的自己主張、アサーション、自尊感情、自負心、 共感的コミュニケーション、 人間関係スキル 社会的スキル 問題解決能力、課題発見能力、問題提起能力 分析的思考、批判的思考、創造的思考 コミュニティ意識 協力、協調、協働 提言、社会的行動 想像力、価値観、相対化</p>	<p style="text-align: center;">参考</p> <p style="text-align: center;">WHOのライフスキル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意志決定 ・問題解決 ・創造的思考 ・批判的思考 ・効果的コミュニケーション ・対人関係スキル ・自己意識 ・共感性 ・情動への対処 ・ストレスへの対処

アクティビティを総合的な学習にどう取り入れたらいいか

アクティビティを年間のカリキュラムに位置付けておくことも可能ですが、子どもたちの実態に合わせて、「ゴミ問題」に取り組もうとする時に、子どもたちが物質循環という概念を理解していないようであれば、「朝食はどこから」をやって、共通理解の基盤整備をしてから、学習を展開していくというような方法もあるのではないのでしょうか。アクティビティは、比較的年齢層の広い学習者に対して応用することが可能です。